



A1
2009



西野古海閣

茂木百太郎編輯

單語教授解全

明治八年第四月

二十三日稟准

西野氏藏版

單語教授解序

古今有言風俗者政事之田地也。余廣其說

回教化者風俗之堤防也。夫田地確則耕

耘雖力難以得嘉穀堤防毀壞則田地雖美

難以免水患故教化不洽則風俗不正風俗

不正則雖有良法美政未可遽致雍熙之治

甚矣教化之不可忽也而洽教化之要在學

校也。方今奎運隆旺八十之州三千之鄉無

不有學校之設而能躬親率先以誘掖生徒

如茂木氏者余未多聞也。茂木氏之為教員

明治八年圖書寮交付

單語教授解序

西野古海閣

茂木百太郎編輯

單語教授解全

明治八年第四月

二十三日稟准

西野氏藏版

單語教授解

古今中外

風俗者

難免水患

不正則雖有良法

甚矣教化之不可忽也

校也方今奎運隆旺

不有學校之設而能躬親

如茂木氏者余未多聞也

明治九年圖書寮交付

之田地也余廣其說

也夫田地確則耕

防毀壞則田地雖美

難以免水患故教化不洽

則風俗不正風俗

不正則雖有良法美政

未可遽致雍熙之治

甚矣教化之不可忽也

而洽教化之要在學

校也方今奎運隆旺

八十一之州三千之鄉無

不有學校之設而能躬親

率先以誘掖生徒

如茂木氏者余未多聞也

茂木氏之為教員

單語教授解

也。出則誨而不倦。入則學而不厭。是以鄉黨
靡然嚮學矣。今又綴輯此書。以便見輩。其用
心可謂至矣。嗚呼。世之為教負者。皆能效其
所為。則教化何憂不洽。風俗何憂不正。而雍
熙之治。亦庶幾於興乎。刻既成。乞余題言。與
茂木氏。無素。半面識。然嘗聞其名矣。今見此
書矣。於是乎欣然題一語。云爾。

明治八年十一月六日 常陸 安藤 定

東書館

編輯 單語教授解

單語教授解

下野 茂木百太郎 編輯
山城 西野古海 校正

數 はらふ 三續あり 基數大數小數是あり 小數といはずとどきやども
つみやを云ひ大數といふより上の數を万とて億とまを云ふ

| | | | |
|---|-----------------------|---|---------------|
| 一 | 數の始めとして、物の二と多いものを云ふあり | 二 | 一と一を合たる數を云ふあり |
| 三 | 二と二を加たる數を云ふあり | 四 | 二と二を合たる數を云ふあり |
| 五 | 三と三を加たる數を云ふあり | 六 | 三と三を合たる數を云ふあり |
| 七 | 六と一を加たる數を云ふあり | 八 | 四を二つ合たる數を云ふあり |

算語

南山堂

教授解

南山書屋藏

九 五と五を加たる数を云ふあり

十 五を三つ合たる数を云ふあり
二より十までを基数とす

百 十を十合たる数を云ふあり

千 百を十合たる数を云ふあり

萬 千を十加たる数を云ふあり

億 萬を萬合たる数を云ふあり

兆 億を萬加たる数を云ふあり

方 けう天地間のあらゆる物の方向を云ふあり

東 大陽の出ると見える方を云ふあり

西 大陽の没すると見ゆる方を云ふあり

南 東へ向て右の手は當る方を云ふあり

北 東へ向て左の手は當る方を云ふあり

乾 西と北の間を云ふあり

坤 南と西の間を云ふあり

巽 東と南の間を云ふあり

艮 北と東の間を云ふあり

上 人にて云へば頭あり

下 人にて云へば足あり

左 東へ向て北の方を云ふあり

右 東へ向て南の方を云ふあり

前 人體を以て云へば顔や腹の方を云ふあり

後 人體を以て云へば背の方を云ふあり

中 一尺あるものありて五寸目の所を云ふあり

度 一は長さ、二は廣さ、三は高さ、四は深さを計る名、五は度と云ふもの
さし一の台あり

丈 一尺を十合たるものを云ふあり

尺 一寸を十合たるものを云ふあり

寸 一分を十合たるものを云ふあり

分 一分を十合たるものを云ふあり

教授解

南山書屋藏

新抄解

釐しん 一毛を十合なるものを云ふあり

毛もう 一厘を十半分たを云ふあり

距離きょり 道の程を量る名なり

間ま 六尺を云ふあり

町ちやう 六十間を云ふあり

里り 三十六町を云ふあり

量地りやうち 地面の坪数や畝を量る名なり

歩ふ 六尺四方の地を云ふあり

畝せ 一反を十半分たを云ふあり

段だん 一畝を十合なるものを云ふあり

町ちやう 一反を十合たるものを云ふあり

量りやう 五穀を焙り流動物として、瀾をいれ油、水などを量る名なり

斛こく 一抄を十半分たを云ふあり

斗と 一斛を十半分たを云ふあり

升しやう 一斗を十半分たを云ふあり

合が 一升を十半分たを云ふあり

勺しやう 一合を十半分たを云ふあり

抄しやう 一勺を十半分たを云ふあり

撮さつ 一抄を十半分たを云ふあり

衡へい 物の軽さを計る名なり

貫かん 一匁を千合なるものを云ふあり

匁もん 一分を十合なるものを云ふあり

分ぶん 一匁の十分の一を云ふあり

釐しん 一分の十分の一を云ふあり

毛もう 一厘の十分の一を云ふあり

糸いと 一毛の十分の一を云ふあり

改定解

貨數 八金銀 權幣をりをへむ名あり

圓 一錢を百合たるものを云ふ

錢 一厘を十合たるものを云ふ

釐 一錢の十分の一を云ふ

時數 一八時や月日を計る名あり

春 四季の内最初の季候より、二月三月四月の三ヶ月をいふ

夏 第二の季候より、五六月の三ヶ月をいふ

秋 第三の季候より、八月十月の三ヶ月をいふ

冬 秋の次の季候より、十一月十二月の三ヶ月をいふ

七値 七曜星を計りくる名あり

日曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

月曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

火曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

水曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

木曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

金曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

土曜 七曜星の二より、此星の北斗星に向ふ日

天文 日月星辰雨露雪霜風雷等のことをいふ

日 光と熱を萬物に與て、萬物を生ずる

月 日光を受けて輝き、一年十二回地球を用る

星 空にありて、光輝を放つものをいふ

風 地氣太陽の熱を受、輕稀となりて上騰し、他所の冷氣動きて來て、其稀薄なる所を補ふ

雨 水蒸氣の昇りて雲となり、又空中の冷氣に觸り凝聚し、水滴となりて地に降る

雷 陰陽の二氣相觸ま、空中より轟声を發す
まろものを云ふあり

雷 雷の光を放て雲間よりらりりくものを云ふあり

雲 水蒸氣の昇て凝聚し、空中より浮遊する體を云ふあり

霧 水蒸氣寒さの爲に地上より近接する所にて凝り雲の様ありるものを云ふあり

露 晚間より水蒸氣の蒸發し、夜の冷氣より草木杯に凝りるものを云ふあり

霜 露の寒さの爲に凍りるものを云ふあり

雪 水氣昇騰し、寒さの爲に結晶し、花の如く六葉の形をなす、地より降るものを云ふあり

氷 水寒さの爲に凍合し、なるものを云ふ、凡池沼杯の凍る時、寒暖計の水銀行て三二度に止れりといふあり

霰 雨の空中よりありて、未だ地より降らざる前氷で顆となりて降るを云ふあり

日蝕 地球と太陽の間、月の夾りて、太陽の光輝を遮り、太陽の全面を現さるるを云ふあり

月蝕 太陽と相對し、なる中間に地球の夾りて、太陽の反射を遮る由あり

暈 空中の水氣凝結し、なる所へ日月の光輝映りて現るるものあり

虹 實際の水蒸氣、太陽の光輝映りて、現るるものなり

雹 雨の空中より氷結し、地より降るものあり、大なるものは桃李の如くなるもあり、田圃杯を荒むものあり

霰 雨雪の交て降るものを云ふあり

曇 雲ありて、太陽の光輝を覆ふを云ふあり

霧 三日以上もつきてふる雨を云ふあり

北極 地球の軸の北の端を云ふあり

南極 地球の軸の南の端を云ふあり

日向 一點の妨なく太陽の照る所を云ふあり

夕立 空の急な曇りて、つよくふる雨を云ふあり

夜受降

秋 空氣の力に因て燃るものなり

時令 春夏秋冬まじく 晝夜寒暑等をまべて云ふ名あり

朝 日の出づるを云ふあり

夕 日の没るを云ふあり

朔 日の出るより日の出る迄を云ふあり

晝 日の出より日の入りまでを云ふあり

夜 日の入るより日の出る迄を云ふあり

一昨日 今日より二日前を云ふあり

昨日 今日より一日前を云ふあり

今日 その日を云ふあり

明日 今日より一日後を云ふあり

明後日 今日より二日後を云ふあり

暖 寒より暑なり於中和の時候を云ふあり

長閑 なる日のらりと長く一づらあるを云ふあり

暑 地球の行道が太陽に近ばきて熱を受ると最も甚しき時節を云ふあり

涼 暑氣の去りたるを云ふあり

冷 寒さの薄きを云ふあり

寒 地球の行道が太陽を遠く離て其熱を受ると至て薄き時節を云ふあり

冬至 大陽の最も南を行て、日の短き極度を云ふ、是より一日毎小日長くあるあり

夏至 大陽の行道が南より漸々北なるなりて、最も日の長き極度を云ふ、是より一日毎小日短くあるなり

地理 山川湖海村里田畝等の類を地理と云ふあり

水 水素と酸素の集合してあり、ありて、凡て一大洲中の小部分よりて、帝王統

土 水々きの集りて、萬物の生まるもの

國 領の有る所を云ふあり

郡 國中の小部分を云ふあり

府 町の最も大なるものなり、諸人の群集する所を云ふあり

縣

田舎より、年貢を取立て、其外凡て、その地方の事務を取扱ふ所ありて、諸人の多く集る所を云ふあり

山

上石の平地より高くして、多くて藁木のあふものなまとも、稀に草木を云ふあり

谷

山々との根ぎはの折合ふたる所を云ふあり

坂

道の平地より、さへ高くありたる處を云ふあり

岨

山の立わたりまるとき處を云ふあり

崖

山の邊のさか立た處を云ふあり

巖

山の骨とある大石にて、山土に凝結したるものを云ふあり

石

土や礦物の凝聚したるものあり

泥

土と水と混合したるものあり

川

凡て水の流る處を云ふ、多くは湖水山谷の間より流れ出るものあり

澤

山間の低くして濕り、水草杯の生ふる所を云ふあり

沼

池の大多るものより、水の流まじりて、引入れたるものを云ふあり

堤

土を築て水患を避るものを云ふあり

溝

城の外杯小水の落込様小堀たるものも、大なるものあり、海に注ぎ入り、水運の便を得るものあり、大坂道頓溝の如きものあり、また大川より水をとり、田地の用水をまるとき流れを云ふあり

堀

船杯の往來せる様小池を穿たる所を云ふあり

波

水風の為に動揺して高低をなすものを云ふあり

峯

山の高くして、尖りたる處を云ふあり

峠

山上道を通りて、往來せる處をいふ相模の函嶺如きものあり

麓

山足に林の属する處を云ふあり

嶺

山の最も高きまのを云ふあり

洞

山の内部の水が推出し、時々出来穴を云ふ、まるとよりあふるをもいふ

砂

石の至り細なるものを云ふ

海

大洋の陸に近づきて、百川の流れ込所を云ふあり

港

海水の陸に入込下、船の碇泊する便ある所を云ふあり

池

地を穿て水を蓄へ置く所より、多くて魚杯を畜ふものあり

岸

水涯に際高くまをたちたる處の陸を云ふあり

橋

木石或は鉄を以て川の兩岸へ架し、人馬等通行の便利を能くするものあり

瀧

凡て高き所より、低き所へ水の落るを云ふあり

嶋

水四方を取り巻きたる陸土にて、人のまゐる所を云ふあり

浦 川の流あるま又外より流進入る川を云ふ本邦にて海を受る處を云ふ

濱 海に長く陸の沿ひたる所を云ふる
津 行旅往還の渡場の極りてある所を云ふる

洲 水中より自然と高まりたる砂地を云ふなり
湖 四方皆陸にて圍み中水の有るを云ふ稀に一方開き河海に流ま出るもあり

瀬 水の小石の上を流て産する處を云ふる
渚 沙地突出たる處に水の溢れ來り又引き去る所を云ふる

汀 河海杯の水際を云ふる
灘 水の流の急る處に小石ありて水これ激し阪を有て落る處を云ふる

中 海の岸を遠く離たる所を云ふる
零 水のきりきをえくる棒杭を以てする

干瀉 海邊にて沙の満干ある處を云ふる
潮 海水の地球と日月との引力に因て日二度に盈涸するものあり

漣 風の為るあやをるす波を云ふる
沫 水中に生するものを云ふる

樋口 水を溜たる所より水を通る木を以て口をつけたるものを云ふる
水柵 木竹を連排して水を除るもの

浮標 船の行筋を知らせるものを云ふる
江 海の陸に入たる處を云ふる

暗礁 水面に現まざりて水中に隠るる岩を云ふる

村 郡中の小部分あり
里 村の中の人家の群りたる處を云ふる

市 諸人の集りて貨物を交易する處を云ふる
町 人家の並び立て商人の多く集り住む所を云ふる

田 水を引入て稻を作る場所を云ふる
圃 野菜杯を作る地面を云ふる

森 林のこも樹木の繁茂したる處を云ふる
林 平地にて樹木の多く生たる處を云ふる

岡 低い脊の起るから起りて連なるものを云ふる

野 ノ 人家の子き處より、草木杯の生るりありて置く處を云ふ故に禮儀を
知ぬ人を野人と云ふ、

道 ミチ 往き向ふ筋の定りて、諸人の往來する
所を云ふあり

街道 カミミチ 人の往來する道の太きもの
を云ふあり

井 イ 土を穿て、地中の水を汲出ま穴を云
ふあり

鐵道 テツドウ 蒸氣車の輪の這入べき様、小鐵の棒二本を横に材木を並べ、上は渡り、
其上を蒸氣車の走る所を云ふ

洋 ヨウ 海の打開きてあきりの見えぬ處を云ふ
あり

岬 ササギ 陸の海中に突出したるものを云ふあり

磯 イソ 沙より少く大なる小石を云ふあり

瀟 シウ 波の高大なるを云ふあり

湍 タン 水中に高き所ありて、そより急
奔流するものを云ふあり

灣 ワン 岸の曲て内は水の入込たる處より、港
より大なるものを云ふあり

衢 キ 四方に道ある處を云ふあり

藪 ヤブ 山谷の間の水なき地を云ふあり

嶺 リウ 山の頂上を云ふあり

垤 テイ 平地の少く高まりたる處を云ふ
あり

塋 エイ 墓地の圖を云ふあり

小路 コウジ 街道より分るたる徑を云ふあり

開墾地 カイケンチ 草木、岩石等の多くある地を切り
開き、耕作する所を云ふあり

泉 イハヒ 地中の水の湧出る所を云ふあり

磯 イソ 水邊の突出したる石、波の打合ふ處を
云ふあり

嶼 シマ 小なる島を云ふあり

渡 ワタリ 往還の大路より、舟に、渡船のあり
云ふあり

浪 ナミ 波の風の為、激しく、逆巻くものを
云ふあり

淵 フチ 深き水の底を云ふものあり

邊 ヘリ 凡て物のふちを云ふ、國のそば、國境を
云ふあり

畷 ウチ 田の中の賣き路を云ふあり

畔 キナ 田の界あり

丘 カミ 平地の坂を高くあがりて上の平
地なるものを云ふあり

墓 カネ 死者を埋葬したる所、標を立てたる
ものを云ふあり

峽 セキ 山と山の間の道を云ふあり

考 考 辭

一 百 一 十 五 居 處 辭

居處 宮殿樓閣家居等をまべて居處と云ふあり

宮 天子又皇族の住を給へる家を云ふなり

殿 高貴ある人の住む所を云ふあり

樓 家の組立を高く作りたるを云ふあり

城 堅固なるを築き壁を穿り墨を積んで、敵を防ぐものあり

廳 公家の諸務を取扱ふ所を云ふあり

驛 人馬の継立をまする所を云ふあり

邸 屏又そ垣を築きて、人々の住居まる構の内を云ふあり

宅 風雨寒暑を避る為に作るものあり

店 品物を並て商まる家の前面を云ふあり

倉 米穀を蔵し置く處あり

厩 馬を飼ふて置く所を云ふあり

門 家の前の出入口を云ふあり

戸 木にて槓を作つて板を張る家の入口にて、開閉せるものあり

扉 門に付たる戸にて、槓を以て、開閉せるものあり

門 門の扉の開あざる様を押へ置く、四角の棒を云ふあり

庭 軒柱を植て家の前後もある隙地を云ふあり

社 神を祭て安置せる家を云ふあり

寺 佛像を安置し僧尼の住する所を云ふあり

礎 家の下を柱を受る為に敷たる石を云ふあり

柱 材木を四角削り家の四方を立て、屋根を支るもの云ふあり

棟 梁の上をありて、屋根の真中にある木を云ふあり

梁 棟を受る為に横架したる木を云ふあり

椽 棟より下の方へ斜に架したる小き角材を云ふあり

桁 柱の上を乗て、梁を受くるものを云ふあり

貫 屏板を板をうちつける為に横置き渡たる木を云ふあり

桁 柱の横に出で、簷や廡などの桁を受るものを云ふあり

簷 屋根の端を云ふあり

廡 屋根の下も又屋根を作り足したるものを云ふあり

収 綬 解

十 角 口 言 居 處 辭

教 授 辭

南山書屋藏

屋根 薄き板を並べ、或は茅瓦を以て葺き、稀に銅を以て覆ひ、風雨を防ぐ、そのを云ふあり

瓦 埴を練りて形を造り、竈に入まを焼て、家根を葺為し用うるものを云ふあり

壁 泥を塗る風雨を禦ぎ、又家の間仕切らるるものを云ふあり

垣 根を往來するを防ぎ、又内外の見えざる様ふ、土を以て造り、郷を占むるものを云ふあり

屏 材を建て貫を通し、板を張て、内外の見えざる様、又根を往來の出来ぬ為に造たるものを云ふあり

窓 家の壁杯を口を付け、大陽の光線を引き、又空氣を入る為に造たるものを云ふあり

天井 屋根の裏の見えざる為に、板を張たるものを云ふあり

敷居 戸障子のそまる様、溝を穿たも木の下の下りあるものを云ふあり

鴨柄 敷居より深く、戸障子のそまる様、溝を穿たも木の上りあるものを云ふあり

障子 木にて細き格子を組り、之におちを付、紙を張り、敷居鴨居にすまひ、風を防ぎ、又内外の見えざる為に用るものあり

閨 家の奥よりありて、寢臥する所を云ふあり

部屋 家の内よりあまりを削り、住居する所を云ふあり

戸棚 家の内より板を架し、諸品を合置くものを云ふあり

土藏 丈夫に作たる家、壁を厚く削り、入口を狭くし、諸道具を合置き、火災を防ぐものあり

穴藏 地を深く穿り、周を木或石にて支へ、火災の時諸品を藏し、そのを云ふあり

湯殿 身体を清むる所を云ふあり

厠 人の兩便をきる所を云ふあり

馬立 馬を繋ぎ置く為門の内より外へ其たるものを云ふあり

牢獄 公の親を背きたる罪人を入置置く格子の家の家を云ふあり

長家 一ツの棟より住居を幾何にも併けたり云ふあり

平家 二階の多き家を云ふあり

二階 平家の上より又家を重ねたるを云ふあり

張附 襖様格のある紙を壁杯に張付たるものを云ふあり

襖 細き木より格子を作り、それ縁を付紙を幾重にも張り、其中に書画杯を置き家の内の敷居階居に嵌り又又欄の前も嵌るものを云ふあり

錬化石 地土を錬り、籠を全焼たるものなり、家を作るに用るものあり

敷石 通行道に平ら並たる石を云ふあり

格子 外より家内を見えざる様木をさし、廻り家の合を立て置くものを云ふあり

欄干 橋又廊下の端杯に外落ぬ様木、横にたる木を云ふあり

隅子 窓杯内を見えざる様、小さき木又竹をうち付たるものを云ふあり

羽目板 壁の崩れ易き所へ板を張り付て之を押し置くものを云ふあり

華表 神社の前は二本の木を立て又上る木を架くるものを云ふあり

閼 門の扉を止る木を云ふあり

人倫 男女父子、農工商等をまてて人倫と云ふあり

天子 一國の主にして制度を立て萬民を總括し給ふ御方なり

太皇太后 天子の母御を申せあり

皇后 天子の御妻を申せなり

皇太子 天子の御世継の皇子を申せなり

皇子 天子の御子を申せあり

太上天皇 天子の父を申奉るあり

皇族 天子の家族を皇族と申せあり

華族 皇族に次ぎ士族の上の位なるものなり

士 華族に次ぎ平民の上の位なるものを云ふあり

農 田圃を耕耘し、米穀野菜等を作り出さるものを云ふあり

工 家屋を作り橋梁を架し、或ハ諸道具等を造る諸職人を云ふあり

商 諸物を賣買するものを云ふあり

民 土農工商をまべて云ふあり

男 陽子に強きものを云ふあり

女 陰子にして弱きものを云ふあり

夫婦 男女の配偶一人生涯を共にするものを云ふあり

父 我を生くる男を云ふあり

母 我を生くる女を云ふあり

子 我の生たるものを云ふあり

孫 子の生たる子を云ふあり

兄弟 父母を同くし、我より先も生きたる男を云ふなり

弟 父母を同くし、我より後も生きたる男を云ふなり

高祖父 曾祖父の父を云ふあり

高祖母 曾祖父の母を云ふあり

曾祖父 祖父の父を云ふあり

曾祖母 祖父の母を云ふあり

祖父 父の父を云ふあり

祖母 父の母を云ふあり

姉 父母を同くし、我より先も生きたる女を云ふなり

妹 父母を同くし、我より後も生きたる女を云ふなり

伯父 父の兄を云ふあり

伯母 父の姉を云ふあり

仲父 父の兄弟中、第二の男を云ふあり

仲母 父の兄弟中、第二の女を云ふあり

叔父 父の兄弟中、第三の男以下を云ふあり

叔母 父の兄弟中、第三の女以下を云ふあり

季父 父の兄弟中、尤末の男を云ふあり

季母 父の兄弟中、尤末の女を云ふあり

舅 夫の父を云ふあり

姑 夫の母を云ふあり

甥 我兄弟の男の子を云ふなり

姪 我兄弟の女の子を云ふなり

藤 拔 簡

南 山 書 屋 辨

曾孫 孫の生くる子を云ふあり

女孫 曾孫の生くる子を云ふあり

妻 生涯已ふ連作て家事を助けりものを云ふあり

妾 子孫を繁殖する為小抱たるものを云ふあり

臣 君に奉仕する者の総称あり

兒 人の生て未だ年月の過ざらぬを云ふあり

童 人の三四歳より十三四歳迄の間を云ふあり

婢 年限を極め雇えて使役さする女を云ふあり

僕 年限を極め雇えて使役さする男を云ふあり

從者 人小就て奉仕するものを云ふあり

師 學問や藝術を教授せりものを云ふあり

弟子 學問や其外藝術を師小就て學ぶものを云ふあり

朋友 學業其外萬事を共するものを指すを云ふあり

騎兵 馬に跨り槍劍文を携へ戰場に向ふものを云ふあり

步兵 徒て小砲を携へ戰場に向ふものを云ふあり

醫 人の病氣を診察し快復を計るものを云ふあり

尼 削髮し釋教を奉むる女を云ふあり

僧 削髮し釋教を奉むる男を云ふあり

養父 我を育て養立てるものを云ふあり

繼父 父亡く母再び醜る夫を云ふあり

嫡母 我を養ひて生處るれば父の正室を云ふあり

嫁母 父亡く他家小改嫁する母を云ふあり

出母 我を養ふて父の醜別とありたる母を云ふあり

庶母 父の妾を云ふあり

鰥 老て妻あるものを云ふあり

寡 老て夫あるものを云ふあり

從弟 父母の兄弟姉妹の男の子を云ふあり

從妹 父母の兄弟姉妹の女の子を云ふあり

從父 母の兄弟を云ふあり

從母 母の姉妹を云ふあり

教授解

南山書屋藏

身體 頭あり足もどく人體不閉まるのを身體と云ふあり

顔 人體の上よ位一こゝ髪が生くる部を云ふあり

面 耳目鼻口のある部を云ふあり

口 五官の一ありて、専ら消食を主り且聲を出さるのあり

鼻 五官の一ありて、呼吸を助け又と臭いことを主とするのあり

耳 吾音の一ありて専ら音聲を聞くことを主するのあり

目 五官の一ありて、顔面の上邊に鑷懸りて、宛も二面の鏡の如く、その周圍に三枚の膜にてあるこゝを剛膜、脈絡膜、網膜と云ふ剛膜の前方に透明にして、光輝の入り来る部あり、こゝを角膜と云ふ、その後を前房と云ふ、その中水あり、その後の孔を瞳孔と云ふ、光輝の入り来る道あり、此穴の周圍を虹彩と云ふ、亦その中水水影あり、その後を後房と云ふ、亦その中水水影あり、その後を扁圓付あり、こゝを水晶体と云ふ、こゝも光輝の透る道あり、水晶体の周圍に、車輪の縁ありの圓襍列りこゝを毛様起と云ふ、そより後を二体不入房と云ふ、その中硝子液とて、透明なる硝子の様あり、水液元々人後にある莖のこととき、即ち視神經あり、この神經眼球の中へ入り廣がりて視ることを主す

舌 消食器の一ありて、口中にありて食物を味てこれを胃管に推やり、又音聲の程節をなすりのあり

眼 齒の生出る際、肉を云ふあり

歯 食物を咀嚼くことを主り消化スーツの要器ありて、上顎骨と下顎骨より生出て、その半位の部へ齧りて、確と固定するものあり、二種の別あり、一ハ乳齒と云ふ、その數ハ上下各二十枚あり、小兒の初生より、三年の間生列りて、七歳の頃より、十四歳まで脱落するあり、一種ハ永續齒と云ふて、その數上下合て三十二枚あり、この齒ハ乳齒の脱落たる後より生出るものあり、この乳齒と永續齒との代りるを齧齒と云ふ、大抵十四五歳の頃あり

唇 口の門あり、齒を覆ひ發聲の調子を助るのあり

喉 頸の前面あり、膈の下に在り、此中に胃管と氣管の二つの管ありのあり

乳 胸の左右にありのあり

領 頭と脊の間の細き所を云ふあり

牙 口中の齒と並て、食物を嚙碎くことを主するのあり、俗にトキヲをといふのあり

齒 食物を咀嚼くことを主り消化スーツの要器ありて、上顎骨と下顎骨より生出て、その半位の部へ齧りて、確と固定するものあり、二種の別あり、一ハ乳齒と云ふ、その數ハ上下各二十枚あり、小兒の初生より、三年の間生列りて、七歳の頃より、十四歳まで脱落するあり、一種ハ永續齒と云ふて、その數上下合て三十二枚あり、この齒ハ乳齒の脱落たる後より生出るものあり、この乳齒と永續齒との代りるを齧齒と云ふ、大抵十四五歳の頃あり

唇 口の門あり、齒を覆ひ發聲の調子を助るのあり

喉 頸の前面あり、膈の下に在り、此中に胃管と氣管の二つの管ありのあり

乳 胸の左右にありのあり

領 頭と脊の間の細き所を云ふあり

牙 口中の齒と並て、食物を嚙碎くことを主するのあり、俗にトキヲをといふのあり

齒 食物を咀嚼くことを主り消化スーツの要器ありて、上顎骨と下顎骨より生出て、その半位の部へ齧りて、確と固定するものあり、二種の別あり、一ハ乳齒と云ふ、その數ハ上下各二十枚あり、小兒の初生より、三年の間生列りて、七歳の頃より、十四歳まで脱落するあり、一種ハ永續齒と云ふて、その數上下合て三十二枚あり、この齒ハ乳齒の脱落たる後より生出るものあり、この乳齒と永續齒との代りるを齧齒と云ふ、大抵十四五歳の頃あり

唇 口の門あり、齒を覆ひ發聲の調子を助るのあり

喉 頸の前面あり、膈の下に在り、此中に胃管と氣管の二つの管ありのあり

乳 胸の左右にありのあり

領 頭と脊の間の細き所を云ふあり

教 授 解

二 百 一 十 三 骨 解

神 經 色白く、細の線ありありして、腦より支分するもの十二分脊の髓より

布満し、その部の運感覚を主するものあり

腦 頭蓋骨の中に入りてその轉廻壘まざる状宛鳥の腸の如く、色ハ白き部亦ハ

言ハテ都テ人間も言ハテ帝とも云ふべき重きりのあり、終て體中百器、その教

脊 髓 形ハ一條の長き帯の如く、白部より灰色の部あり、周圍を脊骨にて堅固に固め

の指令を受けて、体外諸部不知らむことを主するものあり

精 神 人の心魂あり、そのある處は頭といひ、後ハ人間の胸の中

水 脈 全身諸部を布満て所在を水液を吸摂り、又腸の處より乳糜とて、食物

動 脈 心臓の左室より鮮紅血出テ、此脈を通り、全身を循流て百器を榮養するも

静 脈 血脈の陳汚たるを再び心臓の右室に輸送する脈あり

骨 その質強韌堅剛のりあり、色白く、微く灰がまじり、數ハ諸學士の立方

肋 肺臓心臓と貴重なる形器を固め、至て端軟し、微少の壓搾も忽屈り

脊 骨 自然と前方より右方へ彎曲し、形弓の如く、人さきまじり、左右不備ることなく

胸 肋骨外面の皮肉を云ふあり

心 血液循行器の一なり、鮮紅血心臓の左室より出テ、動脈の中を通り、全身を循流し

受 昇 百器を榮養するものあり

老 木 備

三 南 山 書 屋 藏

肺 呼吸器の一より、空気を呼吸する官能をなすものなり、その中に全身の静脈血輸送
来て、吸氣を觸れて清くする、此血の中にもある汚物、呼吸を伴て去るものあり

脾 消化器の一より、横隔膜の下、左の方にあるものなり、食物を消化するものあり、津液の
様なる滑き汁を細き管より送り出し、食物を消化するものあり

肝 消化器の一より、横隔膜の下にあるものなり、胆汁をこし出し、これを腸に送り、食物
を消化することを主するものあり

腎 分泌器の一より、脊骨の下に在り、尿管をこし、こままりのあり

膽 分泌器の一より、横隔膜の下に在り、肝よりきて胆汁を分泌する、黄色の水を造る
ものを主するものあり

腸 消化器の一より、此中に食物の精令、乳糜とあり、血と混て心臓に入り、竟も血
液とあり、その消化ぬ渣滓、大便とまると主するものあり

胃 消化器の一より、此中に胃液とて、酸液あり、滲透りて食物を消化し、腹の
中に送り遣るものあり

髪 凡て頭部を生ずる毛を云ふあり

腹 五臓六腑のある所を云ふあり

手 体の左右ふありて、我思ふ通に働くものあり

指 指甲の頭小在り、凡て物を取り、或は
捨ることを主するものあり

腰 背の下豆の上下に在りて、体を屈曲する所
を云ふあり

腕 手頭の下に脈のうらう所を云ふあり

腿 足の上部より、肉の多き所を云ふあり

臍 胎衣を切る處を云ふあり

踵 足の下端の後部より、皮の厚き所を
云ふあり

受 昇

三 南 山 書 屋 藏

K-110-3,3

孝
教
解

南
山
堂
印
行

單語教授解 終

明治八年四月廿三日稟准出版

定價拾三錢

枋木縣士族

第十大區五小區

武藏國足立郡西新井村

新井學校寄留

編輯人

茂木百太郎

京都府平民

東京第四大區一小區

錦町一丁目十五番地

出版人

西野古海

東京府平民

第五大區七小區上野元黑門町六番地

發行所

大澤金藏